

したがってKは地層の生成時から粘土質層中に存在していたことが考えられる(前論文参照)。

Russkii Plate-forme の古期砂層中のKの含有量がきわめて高いのは、震旦紀・古生代初期の砂・淤泥層の粗粒相がカリ長石で富化されているためである。しかしこの時代の細粒泥質相は hydromica 質鉱物で富化されている。このような状態は粘土と同様である。カリ長石と hydromica とは成因的に酸性火成岩(露出面積は地質時代の経過に伴なって減少する)と関連性がある。花崗岩状岩石の露出地域の減少は堆積岩の被覆層の増加とそれぞれ関連性がある。すなわち堆積物の沈積・生成は、乾陸の沈降と海進との直接的な結果であるからである。

砂層、粘土層中における Al と Ti の含有量は地層層序の下位から上位にかけて減少する。さらにまた Th と Ti の存在量の周期的変化と造構造運動期との間には密接な関連性が認められる(第3表参照)。Th と Ti の最大含有量は、Plate-forme の基盤岩石の海進期に生成された地層が長期間にわたって侵蝕作用を蒙った堆積岩(被覆)の海進期の地層中に認められる(この種元素の最大含有量は、バルチック Shield 地帯の地塊の隆起運動の最盛期堆積物にもみられる)。したがって緩慢な瀕海地帯の上昇期には Russkii Plate-forme の堆積盆地における Ti, Th の沈積は弱化したことが考えられる。

Russkii Plate-forme の種々の堆積岩型の容積を測定してみると、砂・粘土・炭酸塩質岩石の存在比は33,0 : 19,5 : 47,5 になる。この数値と Wickman の確かめた粘土・砂・炭酸塩の比註4), 83 : 8 : 9 と比較すると、次のことが明らかになる。すなわち Russkii Plate-forme の堆積物は、地球上の堆積物中におけるこの種岩石の平均含有量よりも、炭酸塩を5倍、砂を約2倍以上、粘土 $\frac{1}{2}$ 以下を含んでいる。

結論として次のようにいえる。Russkii Plate-forme の堆積物は、ケイ酸・アルミナ・鉄・チタン・アルカリの含有量が著しく少ないが、カルシウム・マグネシウム・炭酸・硫酸塩に富んでいる。これらの状態から推定すると、Russkii Plate-forme の堆積物の特徴的指標として

- (1) 地層の厚さが比較的薄い。
- (2) 傾斜が緩慢である。
- (3) 浅海性である。
- (4) 特種の岩石種 (gaize, tripolite, 純粹ケイ砂など) の賦存の可能性

があげられる。

註 4) Wickman, F. E.: The «total» amount of sediments and the composition of the «average igneous rock», Geochimica et Cosmochimica acta, 5, 3, 1954

月報 8 巻 4 号 訂正

23 頁第 4 図と 28 頁第 4 図は入れかわっているため、23 頁の図は 28 頁第 4 図に、28 頁の図は 23 頁の第 4 図に訂正致します。